

うらの はまゆふ

— 万葉集続浜木綿歌考 —

犬 養 孝

私は、昨年六月、短歌雜誌「明日香路」(第三卷)誌上に「浦の浜木綿」(万葉集浜木綿歌考)と題する一文を草して、その末尾を、「私は、まだ見ぬ孔島の群落への遊心を湧かし、黒潮の岸に立つて緑葉の群の中に私見を深め得る日の到来を想望している。」と結んだ。佐藤春夫の「退屈読本」及び「熊野路」の中に、熊野で浜木綿の見事に繁茂しているのは新宮市三輪崎の孔島だけであろうとあるのを読んで、他日探訪の機会を待つていた処、たまたま昨夏七月、浜木綿の開花期にこの島をおとづれることができた。私の続浜木綿歌考は、この地の景観を語ることからはじめねばならない。

二

那智を出た汽車が宇久井の突角を廻ると、佐野の灣入は一眸の下に開け、その北東の突角部に三輪崎の町があり、更にその東方に鈴島・孔島の小島が浮かぶ、一昨冬「神之崎」狭野の渡」のことを調べにいた時は、突角から島を眺めるのみで終つた。今回は小船をやとつて島にわたる。三輪崎の港と対岸鈴島の磯との間は二百米足らずの渡しである。鈴島は若干の松などを配した岩嶼にすぎなく、浜木綿は一本も見られなかつた。鈴島と孔島の間は防波堤につながれていて、烈日の下、真晝の透きとほる海中には所々海女の姿も散見していた。堤防伝ひに孔島にむかふ私の双眸の中には、既にこんもりした小社を中心に島をとりまく浜木綿の白花の乱れが点々と映つてゐた。

洋々たる黒潮の輝きを背景にして、群落自生する浜木綿の開花のただ中に立つた私には、こぼれ咲く白花の一片にも、豊かな潮の音が響くかに思はれた。舌形闊大の厚い艶やかな緑葉は、一株から幾十枚となく出て、高いのは一米の余に及び、互ひに重なり重なつて、湿しくもつた精神的な感じである。それが他の葉と交錯して群落し、地にはハマゴウの蔓草が密生してその一部は緑葉にからみつき、緑葉は緑葉と層々相重なる景観は、はてしない豊潤さと思はせてまことに壯観である。しかもその叢葉の間の下部からはいづれも太い花莖が胸元の高さまで斜めから天空かけて伸び上り、その花莖の先端(梢頭)には二十内外の白花が簇り開き、その一花毎に開いた六瓣の白い花びらは梢頭からくづはれこぼれるように乱れ垂れて、この逞しい緑葉の中からかくも清楚可憐な花が咲くかと思はれやさしい気品の中にもどこか艶麗さをさへ示してゐて、それが群落のそこにもここにも見られ、小島全体が芳香にみちみちた感であつた。

近頃すこし減少したといはれるが、それでも島のぐるりにまさに密生してゐて、磯

に向つてさし出た濃い緑葉の先端には、黒潮の影さへ映るかに思はれた。

三

み熊野の浦の濱木綿百重なす心は念へど直に逢はぬかも

(卷三・四九六、人麿)

万葉集中ただ一回所出のこの「浜木綿」は、もちろん、従来の諸注の如く、石蒜科常緑多年生草本の前記「浜木綿」(浜おもと)をいふものであらうが、これを、植物名と見ず、波頭をたとへたものと見る説がある。「代匠記初稿本」「万葉集目安補正」の説がそれで、「補正」には「波頭をゆう花に見立し格によりて浜ゆふの花の百重に立かさなりくるを云也。近世一種千瓣さく草の花を、浜ゆふと云は、謬物也其状蕃種にて、この物にあらずと思ゆ。紀伊は暖国なれば、さる蕃種をよく育つをもて、植たるが広がりしより、後に諺れるなるべし」(「万葉集叢書」)とある。近頃では土屋文明氏が「万葉集門外語」(国文学誌「昭和六年十二月号」)「浜木綿」(「万葉紀行」私注第四卷)で、この波頭説をよしとして居られる。私は「波頭」説には以下の理由で賛同し難い。

第一に、波を木綿花にたとへた例として「代匠記初稿本」は、

相坂をうち出でて見れば淡海(あぢみ)の海(うみ)白木綿花(はくもめん)に浪立ち渡る(巻十三・三三三三) 泊瀬(はくせ)女の造る木綿花(はくもめん)み吉野(よしの)の瀧(たき)の水沫(みづうめ)に聞きにけらずや(巻六・九一二) 泊瀬川(はくせがわ)白木綿花(はくもめん)に落ちたぎつ瀧(たき)を清けみと見に来し吾(われ)を(巻七・一一〇七)

を挙げ、土屋氏はその近似例として、

山高み白木綿花(はくもめん)に落ちたぎつ瀧(たき)の河内(かふち)は見れど飽(あ)かぬかも(巻六・九〇九) 山高み白木綿花(はくもめん)に落ちたぎつ夏身(なつみ)の河門(かど)見れど飽(あ)かぬかも(巻九・一七三六)

を挙げて居られるが(「万葉紀行」)、これらは何れも「水の白く泡立ち乱れる姿」であつて、「水の幾重かさなる波」ではない。また浜木綿歌の「百重」にあふものでもない。更に、言ふならば「波」を「浜木綿」といつた用語例もない。第二に、「入間道(いりまぢ)の大家(おほや)が原(はら)の伊波(いは)波(なみ)為(な)都良(とら)」(巻十四・三三七八)「三島江(みやま)の玉江(たまえ)の鷹(たか)」(巻七・一三七八)等の如く、地名をので結んでいつて、その地の何ものかを点出する表現法に於いて、浜木綿即波頭の如き完全譬喩物を点出する表出法は、集中には見られない。

「玉江の鷹」にしても、一応は「鷹」そのものを表はしてある。第三に、事実、南紀に「はまゆふ」と称する駿地特有の植物がある。命名の前後は問題になるところもあらうが、既に日本植物分布区系にハマオモト線(小清水卓二氏)の發見されている今日、「目安補正」の「蕃種を植たるが広がりしより」などは問題にならない。今日、近畿地方では、南紀海浜地にわたつてのみ、いまだ多く群生するのを見れば、古代より、近畿ではかの地特有の風土的情趣に富んだ植物であつた、と見るべきである。この事実があつた上では、敢へて諸所の海に多く見られる「波頭」を考へるよりも、万葉集中無数に見られる彼の、地名に次いで其他のより多く風土の関聯をあらはすものを点出する表出法にならつて、熊野の植物と見る自然さを探るべきではなからうか。かやうに見てこの歌の持つ若干民謡的風趣も理解されるのではなからうか。第四に、この歌の心情表現の構造の上から見て、植物と見るべき必然性の存する処は前の「浜木綿歌考」に詳述した所であり、また後述の中からも了得し得る所であらう。

かくて、私は波頭説を排して、通説の如く、俗に浜おもとと称する前記の植物名と見るのである。

四

さて、植物名「浜木綿」とすると、如何なる種類の「はまゆふ」であろうか。既に「万葉集品物解卷ノ二」に大和本草の説をひいて「今按に、二種あり、一種は葉柔に薄く、其莖の皮多く重れり、是百重成とよみしなるべし、一種は葉つよくあつし、其莖かさならずといへり」とあつて、二種あることが注目されてゐる。私は初め、知人から分けてもらつた「はまゆふ」を庭に植ゑると、四五月頃から濃緑の葉数をかさね、七月中旬のとある日には、伸び切つた花苞の尖端が割れて、待望の開花を見た。然るに白花ならぬ薄桃色で、花の数も十二・三、期待とは異なつて、どこか淋しく可憐すぎるものであつた。早速「綜合新植物図説」(村越三千男著)を調べて見ると、「ふんどはまゆふ」(学名 *Critium latifolium*) といふもので、原産地、東印度とある。その後、紀州より持来したものは、莖の根元は両手でかこめない程の太さに短

長し、孔島のと同じ逞しい葉を、これは「いんどはまゆふ」よりも、もつと幅広く厚く、葉の重なりもはるかに密集して、「いんどはまゆふ」の葉が素直に細長いのに較べて、舌状潤大部が波うちくびれてゐて、逞しい植物エネルギーを身近かに感じさせる体のものであつた。これが俗に「はまおもと」(学名 *Critium asiaticum* var. *japonicum*) と呼ばれるもので、「品物解」にいふ二種も以上の二種を指したものであらうと思はれる。但し、その解説は実物をよく見てゐるものとは言ひ難く、葉の柔かに薄い方(「いんどはまゆふ」)は、莖の白い部分を幾分露出してその上に葉が重なるに對し、葉強く厚い方(「はまおも」とは莖の根元から直ちに葉が重なり重なつて密生してゐて、「莖」の印象などは、一見、見る者に與へない。南紀では、孔島を初め自生のものはもちろん、鉄道の駅々、或は潮の岬の黒潮旅館の周囲等に植栽されてゐるものも、すべてこの後者の「はまをも」と「以外にはないから、「三熊野の浦の浜木綿」もこの種類として、更には、この植物生態に於いて、更に、鉢植栽培などの生態でな

せらるべきである。

五

では、「浜木綿」の「百重なす」は葉か花か。私が、葉でなければならぬとする処は、四までの叙述の中からも理解されて來ると思ふ。従來の諸注も概ね葉とされて來るが、「莖の皮幾重にも重なる」(「考」一「略解」「古義」折口博士「口」)と見るのは、濱田氏「柿本人麿」等)と見るのは、濱木綿の生態の実体実感に疎いものといはねばならぬ。花が「百重なす」と見るものは、鴻巣盛広氏に「浜木綿の百重」(「解説」昭和十五年二月号)があり、武田博士の「全註釈」は「訳」では葉とし、「釈」では花とし(巻四・四七頁、齋藤茂吉氏の「人麿評釈篇上」では蕾の状態にもその感じがあるとしてゐる。花は極めて美しいが、あのくづはれ、乱れ、垂れて咲く花が、群落であればなほは互ひに距離をおいてゐて、到底「百重なす」でないことは、これまでの叙述と併せて、凡そ了解されるであらう。

更に、私は、前の「浜木綿歌考」に於いて、この一首の歌の表現を通して見た一句

毎の心情表出の在り方を吟味し、全体の歌としての美の構造を考へ、特に声調上よりもこれを探索して、これを葉と見るべき必然性の存する所以を考察した。詳しくは同誌を参照していただければ幸甚であるが、孔島の体験を基にして若干これを補つておきたい。

六

「浜木綿」は、一株でも幾十枚もの濃緑の葉を、もりあがるやうに重ね重ねて開いてゐるが、その一つ一つにハマゴウがからみついて、所狭く群落をなす景観は、全く連綿とはてしなく打ち重なつた暗鬱な位の情熱の潜在力を思はせる。一方、心情表出の在り方から見れば、「心は念へど」は単に「思ひ乱れる」それではなくて、「不可能の中でこれを早く可能にしようと思ひつみ思ひつむ姿」であつて、深く沈潜懊悩する裏情がただよひ、また「直に逢はぬかも」も、逢ひたい願望のみでなく、「逢へない中でどうしても逢ひたい」とする思ひの、幾重にもこめられた、重くはれやらぬはてしない心情の表出である。かくてこそ景観と心情との「百重なす」による媒介が

極めて自然に可能になるのである。

「み熊野の浦」も、熊野の何処かは分らないが、その外廓に熊野地方をとりまく大きな黒潮の海があることは孔島の場合と同様であらう。この却つて何処と固定しない大地名の表出に、「浦」の彼方の思ひはるかなはてしない空間を思はしめ、それが「一の音の快調にのつて直ちに、一浦に定

着しついで磯浦の浜木綿に焦点化しゆく呼吸、この景観と融合して重畳集中化しゆく健調による茫漠無限の情熱は、四・五句を得て、暗鬱な潜勢エネルギーの植物生態と共に共鳴して、重なり来る沈鬱にして盡きない情熱の潜勢力を可能にさせる、まことに緊密な構成をなすのを見るのである。

その上、快適な音律美は、歌の構成的効果に於いて、心情表出に不可分な有機的配置がなされてゐる。上句「一の」の音の疊用は、緑葉の幾重とこめられゆく豊かさを思はしめる。それは清楚艶麗の「花」の生態のものではなく、また、この歌の場合人間心情への風土的關聯をより多く失はしめる「波」のそれでもない。更に、○音の配置、押韻の巧みさ(考)に詳述)によるこめられた思ひに適はしい連綿感、それらは相

俟つて、益々重く、益々はてしなく、益々纏綿たる情感の波動を現出せしめてゐる。かの花の繚乱にあらず、かの波の幾重にあらず、百重なす葉として初めて、構成の緊密さの遂げられる所以である。この花、かの波による気の散る世界のものではなくして、百重なす葉による、気の無限集中される世界のものである。

盛夏白晝の熊野の海、折柄潮の千た磯辺に立ち、或は群落の間に身を没して、一入この感を深くし、私の考察に大いなる裏付けを得ると共に、この歌のもつこせつかぬ鈍重な、どこか民謡的な無限裏情の真意も理解できるのである。

七

南紀の浜木綿の自生は近時少くなつたといはれるけれども、まだまだ諸所に群落が見られる。佐藤春夫の文によつて群落は殆んど孔島のみかと思つてゐた処、日高郡出身の関口睦夫君という学生が、昨夏、熊野ではないが日高郡印南町(切目山東北一里半)以北の海岸の浜木綿分布状態を实地踏査して、貴重な報告をしてくれた。

それによると、印南から日高川までの間

は、概ね砂礫の浜で、浜から常緑闊葉樹の混生株に移る地点、又その背後の灌木の疎林の中には、少い所で二三株、多い所では数百株群生してゐるといふ。特に名田村下楠井附近の海岸では、数千株が海岸線に沿うて帯状に連り、やはりハマゴウなどの海浜植物と混生してゐて、見事な景観であつたといふ。日高川口から以北、和田村元ノ巻に至る六軒の松林砂浜の海岸には一本もなく、由良湾口の蟻島、白崎、黒島には大分見られ、有田郡にはゐると自生は極めて稀になるといふ。印南以南は未踏査の由であるが、南^{カタ}部の大字山内・植田附近にはまだ相当あるやうに聞いてゐるし、白浜(牟婁の湯附近)の京大臨海実験所、番所山附近のものは嘗つて実見することができた。

今や、私は、小庭の二種の浜木綿の成長を見つつ、名田村の群落地に新なる思ひを馳せてゐる。

研究部・講演部・出版部
だより

虫のね夜ごとに冴えて、ともし火朗らかに机辺を照らす好季となり、本会の活躍もいよいよ本格的な躍進をとげる事となりました。ここに、昭和二十七年末までの予告を掲示いたします。講演旅行に關しては、その場所に目下交渉中のものであり、或は少数の変更があるかも知れません。期日が近づいたら参加御希望の方は、予め往復葉書で御問合せ下さい。

○万葉作家研究講義会(九月二十日午後一時・二十一日の二日の間)佛英和学院に於て。上代文学会西会支部。この会は今井福次郎氏が創立十数年の歴史に輝くものだが、上代文学会成立と共に発展的合流を遂げ、本会の支部となつたものである。

尙第二日の講義終了後、各大学・高校の学生だけの研究討論会を開く。今井・竹内・森脇氏指導。

○第二回、會員研究発表会(九月二十八日午後一時)駒沢大学澁谷校舎に於て。上代文学会研究部主催。藤森氏・五味氏・石井氏司会。

○熊本市講演会(九月二十八日午後一時)熊本市公民館に於て。本会熊本支部主催。講師||石坂正蔵氏・村中末吉氏・本田義彦氏。

○福岡市講演会(十月五日午後一時)西日本新聞社講堂(予定)にて。本会福岡支部主催・西日本社後援の予定。講師||福田良輔氏・倉野憲治氏・森本治吉氏。

○第一回 万葉旅行(十月二十六日午前八時)武蔵国分寺・多摩の棋山・多摩河(或は、相模国足柄峠)。本会講演旅行部主催。西角井・高崎・谷・田辺氏指導。

○「上代美術と文学」の講演会(十一月二十三日午後一時)東京博物館講堂(交渉中)。講師||博物館役員諸氏、及び森本治吉氏。

○第三回、講演と討論の会(十二月十四日午後一時)駒沢大学澁谷校舎にて。